

ブルデュー『マネ、ひとつの象徴革命』余滴

国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授 稲賀繁美

未完の大作

Pierre Bourdieu, Manet, *Une révolution symbolique* は *Raisons d'agir/Seuil* の *Points Essais* (一冊) の *Point* 二〇一三年に刊行されている。講義録もそれより数年前にパリの書店で見かけた記憶もある。八四〇頁を超えるが、未完の大冊。コレージュ・ド・フランスでの講義速記録を主体とし、後半には草稿状態のメモも収められている。本書が日本語に訳出されるのは、まだ先の事だろうが、思わぬ偶然から、この「未完作」に、最も近傍から関わり損なった研究者として、「今、なぜ？」への補助線を、遺言代りに残して

おきたい。

『機』二二六号(二〇〇二年五月)にも記したが、一九九四年二月二日の私信で、ブルデューは「僕のマネはしばらく諦めた」と告白していた。マネの死後売立ての顛末を分析した英文原稿を送ったことへの返事だった。ブルデューはこの拙文の仏訳掲載も検討してくれていたが、*Actes* では紙面に都合がつかず、また *librairie* では長すぎて、との事情説明だったと記憶する(この書簡は、その後二度の引越があり、目下紛失。「告白」を真に受けて、多忙の社会学者に遠慮したためか、当方は自著『絵画の黄昏——エドゥアール・マネ没後の闘争』(一九九六)をブル

デューの手に届けることは、まんまと怠った。ところが、当のブルデューは、あろうことか、その二年後から、定年前のコレージュ・ド・フランスでの最後の講義(一九九八—二〇〇〇)で、二年間にわたりマネを論じていた——その情報は当時パリ滞在中の岡部あおみさんから伝えられ、いささかならず呆然とした記憶がある。

「醜聞」と象徴革命

そのうち僅か二年でブルデューが急逝するなどは、当時思ってもみなかった。退任して少暇を得た著者が『マネ』を上梓したら、議論を戦わす日も来るだろう、などとタカを括っていたからだ——。

没後に刊行された講義録を見ると、なるほどブルデューの『象徴革命』論と、当方の『没後の闘争』との位相差も頭わ

である。ブルデューはマネの「制作」現場に肉薄し、そこに象徴革命の遂行的様相 *modus operandi* をつかもうとする。だが当方は、「象徴革命」を絵画制作の「内部」に集約するのは無理、との立場である。そもそも『草上の昼食』が一八六三年の落選者展で「醜聞」を招いたとするのが「神話」であると指摘したアラン・クレールの短報記事(*Manet* 四六八頁)をブルデューに最初に知らせたのは当方の筈。そのクレールの論証の核心をなすのが『マネ伝』の「神話的記述」だが、この記述を残した伝記作家テオドル・デュ

レの行状を分析したが、当方の仏文博士論文(一九八八)である。

実際、落選者展での「醜聞」の裏には、もうひとつの「醜聞」が隠されていた。白昼から公道で泥酔する神父様たちを描いた、クールベの『法話の帰り道』。風紀壊乱の規律違反ゆえ、落選者展そのものからも意図的に「落選」となる戦術に訴え、目論見通りに目的を果たした問題作である。なぜこの宗教風刺画が落選者展の「醜聞」として歴史に残らず、マネの『草上の昼食』が「醜聞」として『近代絵画の誕生』(アンドレ・マルロー、ガエタン・ピエモン)を象徴する作品となったのか?——クレールの指摘はここに発生した「象徴革命」の本質を取り逃がしている。さらにサロンに「入選」した『オランピア』の惹起した掛け値なしの醜聞(二八六五)に憤慨し、マドリッドに逃避したマネと

偶然にオテル・ド・パリで初対面したのが、前述のデュレ。その折の被害者妄想寸前の画家の振る舞いを、デュレは安易にも二年遡る「落選者展」にも上乘せしてしまった——というのが真相だろう。

絵画市場をめぐる「象徴革命」は『草上の昼食』や『オランピア』といった「傑作」がマネ没後の売立て(二八八四)で「傑作」へと変貌を遂げ、商品価値を獲得して初めて、成就する。その「変貌」の舞台裏を演出した振り付け師が、画商のデュラン・リュエルと、マネの遺言執行人・デュレ。このデュレ一味の「犯罪」なくして、マネの「未完成作」が「象徴革命」を成就することはなかった。だが聡明な社会学者はその「未完」の『マネ』で「未完」を「完成」させる *opus operatum* の「悪行」に、自らの手を染めることは、遂になかった。

